

胡適の『嘗試集』

山口 榮

はじめに

胡適（適之）の詩は、『胡適留学日記』（台湾商務印書館）、『胡適手稿』^{一八九一—一九二〇}（台北胡適紀念館）、『嘗試集』（一九二二・一〇、上海亞東圖書館增訂）^{一九七〇・六刊}、『嘗試集』（四版、一九八二・二、上海書店復刻）などを見て、かねてより研究の必要性がある分野であると認めながらも門外漢であり、困難を感じて研究するに至らなかったが、此の度、漸く思い切つて研究を試みることにした次第である。

一

胡適は「九カ年の家郷教育」時期^①に、その父胡銜花編「学為人詩」「原学」（共に四言の韻文）、「律詩六鈔」（撰者不詳）、「孝経」「小学」「論語」「孟子」「大学」「中庸」「詩経」「易経」「礼記」などを私塾で学び、余暇に『水滸伝』『三国志演義』『紅樓夢』『儒林外詩』などの白話小説を耽読したという^②。

次いで、胡適は「六カ年の上海遊学」時期^③の中国公学在学中に脚氣病を患い、次兄の経営する上海市の瑞興泰茶葉店で療養していたとき、遇々呉汝綸編『古文讀本』を繙き、殊に第四冊の古詩（樂府、五七言古詩）を初めて読み、さらに、次兄の蔵書の中から『陶淵明集』や『白香山詩集』を見付け出し、また『杜詩鏡詮』を購入してこれらを読んだという。

また、ある日、次兄の店から学堂へ戻る途上で競業旬報社^④に立寄つたとき傅君劍に会い、彼が湖南に帰るといふのを聞き、「我以何因縁、得交傅君劍」の句で始まる送別詩を宿舍へ戻つてから書き、あとで傅君劍に手渡したところ、翌日、「留別適之即和贈別之作」と題した詩を日本の巻紙に書いて返してくれ、その中に「天下英雄君与我、文章知己友兼師」の句があるのを見て驚き慌てたが、この時から発憤して詩人になろうと思ひ、数学の授業中に『詩韻合璧』を代数の教科書の陰で開く程に詩作に熱中し、殊に白居易の詩を数多く読み、学校内で少年詩人の名をもって呼ばれ、

その後、さらに英文の教員の勧めにより英文詩も愛読し、それらを中文に翻訳したり、自ら英文詩を作ってみたりしたという。即ち、胡適は脚氣を患い数カ月の療養生活を送ったのを機に新世界を発見し、それが一生の命運を決定して、その後いくら自然科学の道を歩みたいと思ってもそれが叶わず、結局は文学・史学の道を歩むことになったというのである。⁵⁾

事実、胡適は七年間のアメリカ留学時期に初めはコーネル大学農学院に進み、剪定、接ぎ木、注水、駆虫などを学んだが、種果学を学ぶに至り、リンゴの品種の分類実習のとき、この方面に自らの天分のないことをはつきりと悟り、コーネル大学文学院に転入し、哲学、政治、経済、文学を学んだのである。⁷⁾

しかし、一九一五年五月には、「私の精力には限りがあり、全知全能ではない。私が社会に貢献できるのは私の選んだ仕事によるのみ。そして私の天職、私の社会に対する責任は、私が出来ることで全力を尽くすことにある。今より私は東西の哲学を専ら学び、これを私の仕事とする。」⁸⁾と述べ、文学ではなく、哲学を専攻する決意を表している。

胡適は曾て「哲学は私の職業であり、文学は趣味であり、政治は私の義務である。」⁹⁾と言ったことがあるという。

二

『嘗試集』（上海亜東図書館出版）は胡適の最初の詩集であるだけでなく、中国で最初の白話詩の詩集であり、初版は一九二〇年三月に刊行され、翌一九二一年には再版、三版が刊行されて、二年間で一万部に達し、一九二二年十月には増訂四版が刊行され、一九三三年までに版を重ねること十四版となり、大変多くの人々に読まれたようである。¹⁰⁾

『嘗試集』増訂四版は三編に分けられ、第一編は「蝴蝶」「贈朱経農」「中秋」「江上」「黄克強先生哀辞」「十二月五夜月」「沁園春二十五歳生日自壽」「病中得冬秀書」「赫貞旦答叔永」「生查子」「景不徙篇」「朋友篇寄怡孫経農」「文学篇別叔永杏仏觀莊」「百字令七月三夜太平洋舟中見月有懷」の十四首、第二編は「鴿子」「老鴉」「三溪路上大雪裏一個紅葉」「新婚雜詩五首存一首」「老洛伯」「你莫忘記」「如夢令」「十二月一日奔喪到家」「関不住了！」「希望」「応該」「一顆星兒」「威權」「小詩」「樂觀」「上山」「一顆遭劫的星」の十七首、第三編は「許怡孫」「一笑」「我們三個朋友」「湖上」「芸術」「例外」「夢与詩」「礼」「十一月二十四夜」「我們的雙生日」「醉与愛」「平民学校校歌附趙元任先生作的譜」「四烈士塚上的没字碑歌附蕭友梅先生作的譜」「死者」「双十節的鬼歌」「希望」「晨星篇」の十七首、合わせて四十八首から成っている。そして『嘗試集』に附録として収められている『去国集』は「耶穌誕節歌」「大雪放歌」「久雪後大

風寒甚作歌」「哀希臘歌」「自殺篇」「老樹行」「滿庭芳」「臨江仙」「將去綺色佳、叔水以詩贈別。作此奉和。即以留別。」「沁園春別楊杏仏」「送梅觀莊往哈佛大學」「相思」「秋声」「秋柳」「沁園春誓詞」の十五首から成つていて、これらを合算すると全部で六十三首になる。⁽¹¹⁾

ところで、初めに『嘗試集』は白話詩の詩集であると述べたが、実は、附録の『去国集』は民国五年（一九一六）七月以前のアメリカ留学中の作品集であり、すべて文言による旧詩である。⁽¹²⁾ また、『嘗試集』第一編は民国五年（一九一六）八月から民国六年七月のアメリカ留学最終時期の作品集であつて、「蝴蝶」と「他」以外は矢張り旧詩であつた。⁽¹³⁾

第二編は民国六年（一九一七）一月から民国八年（一九一九）十二月に帰国して北京大学教授として勤めていた頃の作品集であり、第三編は民国九年（一九二〇）七月から民国十年（一九二二）十二月の引続き北京大学教授として勤めていた頃の作品集であるが、民国六年の秋から七年の年末頃に旧詩から脱却して新詩が作れるようになり、「関不住了」（民八・二・二六）の一首は新詩確立を告げる画期的な作品であるという。⁽¹⁴⁾

尚、『嘗試集』とその附録の『去国集』合わせて六十三首のうち、『哀希臘歌』（民三・二・三）は George Gordon Byron: The Isles of Greece の訳詩であり、「老洛伯」（民七・三・一）、「関不住了」希望」（民八・二・二八）はそれぞれ、Anne Lindsey (1750-1825):

Auld Robin Gray' Sara Teasdale; Over the Roofs' 英人 Fitzgerald 訳 Omar Khayyam: Rubaiyat 第一百零八首の訳詩である。⁽¹⁵⁾

又、「秋柳」は『胡適留学日記』二（民三・一一・一三）（頁四六五）に「已見蕭颺万木摧、尚餘垂柳招人來。憑君漫說柔條弱、也向西風舞一回。」戊申（一九〇八）上海にて詠んだ旧作であるとあり、『胡適留学日記』三（頁八五八）では第一句の「已」を「但」に、第三句の「憑君」を「詞人」にし、『嘗試集』増訂四版（頁一九一）や『四十自述』（一九三三、九刊）では第一句の「已」を「但」に、第三句の「憑君」を「西風」にし、此れは七年前の己酉の年（一九〇九）の旧作であるとしている。

「蝴蝶」（民五・八・二三）は『胡適留学日記』四（頁一〇〇七）に「窗上有所見口占」の表題で見え、この詩は新詩試作の成功例であると記している。『四十自述』⁽¹⁶⁾には題目は「朋友」といい、後に「蝴蝶」と改めたとある。

詩句 表題なども推敲を重ねていることを右の例により知ることがができる。

三

『嘗試集』が生まれるに至る契機について、胡適は、民前二年（一九一〇）秋にアメリカに留学してから初めの二年間は二、三首しか詩を作らなかつたが、民国成立後に任叔永（鴻雋）、楊杏佛

一八八六—一九六一
一八九三—一九三三

(銓) が共に綺色佳 (Titica) にやって来て、詩友となり、このため焼け木杭に火がついてしまった⁽¹⁷⁾。もしも任叔永、楊杏佛が居なかつたら『去国集』は無く、もしも任叔永、梅観荘 (光迪)⁽¹⁸⁾ が居なかつたら『嘗試集』は無かつたに違いないと述べている。

任叔永、梅観荘は作詩に白話を用いるよう提唱した胡適に最も激しく反対し、論争している。その争点は概ね次の点にある。

まず、胡適が「送梅観荘往哈佛大学詩」(民四・九・一七)の長詩の中で、牛敦 (Newton)、客兒文 (Kelvin)、愛迭孫 (Edison)、拿破崙 (Napoleon)、培根 (Bacon)、蕭士比 (Shakespeare)、愛謀生 (Emerson)、霍桑 (Howthorne)、索虜 (Thoreau) の九人の人名と地名康可 (Concord)、抽象名詞「烟士披里純」(Inspiration)、各一つ、合わせて十一の漢訳字を用いたこと⁽¹⁸⁾。

次に「依韻和叔永戲贈詩」(民四・九・二二)を作つて「詩国革命は何から始めるとよいか、勿論、作詩を作文と同じように行うことである。」と主張したこと⁽¹⁹⁾。

次に、綺色佳で任叔永、楊杏佛、唐鉞の三人と文学改革について話し合ったときに、白話を用いて、作詩、作戯曲・小説すべきことを主張し、白話こそが活文字であり、今日の文言は死文字ないし半死の文字であると説き、⁽²⁰⁾「答梅観荘——白話詩」(民五・七・二二)に於いて、「二十世紀の活文字は三千年の死文字に勝る。」と説いたことなどである。⁽²¹⁾

これらの点について詩友と徹底的に討論することによって胡適

は自らの主張を系統化でき、それを実験的に試みて確かめようと決意し、陸游の言葉「嘗試成功自古無」を「自古成功在嘗試」と言い換えて、失敗を恐れず、白話詩を試み、詩友たちにも嘗試を呼びかけたのである。⁽²²⁾

おわりに

胡適の『嘗試集』の新詩の特色を「胡適之体」⁽²³⁾と呼んでこれを手本としようとする者もあつたようであるが、胡適は新詩の面でも「但開風氣不為師」⁽²⁴⁾の態度を守り、自ら新詩の嘗試を続行し、一九二二年以降の詩を収めて『嘗試後集』を出す準備を進めていたが、存命中には実現せず、民国五十三年(一九六四)十月に『胡適之先生詩歌手迹』として台湾商務印書館から刊行されている。

胡適は又、一九三四年四月二十日に、今日から毎日一首、暗誦して楽しめるよい詩を書き出して、「每天一首詩」と名付けた詩選集を出したいと記し、⁽²⁵⁾それを実行して、『胡適手稿』第十集に遺稿が収められている。その詩は王梵志、賀知章、王維、李白、杜甫、王安石などから王守仁、趙翼に及んでいる。胡適の新詩は古典への深い愛着を基としているものと思われる。

註

(1) 一八九五・三—一九〇四・二、胡適が数え年で五歳から十四歳のと

きに当る。胡適の家郷は安徽省徽州府績谿県上荘村である。

- (2) 『四十自述』香港世界文摘出版社、一九五四・六刊、頁一七—三〇参照。

- (3) 一九〇四・二—一九一〇・五。十四歳から二十歳のときに当る。この間、梅溪学堂、澄衷学堂、中国公学、中国新公学に於いて学ぶ。

- (4) 中国公学の学生が結成した競業学会の機関紙『競業旬報』の編集、刊行を業務とした。『競業旬報』は一九〇六・九に創刊された白話文による学会誌であり、一九〇八・七の第十一期からは胡適が主編し、多くの散文や韻文を発表している。

- (5) 『四十自述』頁四九—八〇参照。

- (6) 一九一〇・九—一九一七・六。二十歳から二十七歳のときに当る。

コーネル大学農学院(一九一〇・九—一九二二・春)、コーネル大学文学院(一九二二・春—一九二五・九)、コロンビア大学哲学系(一九一五・九—一九一七・五)で修学。一九一七・五・二七、博士の学位最終審査あり、審査委員はジョン・デューイ他計六名、これを以って七年間の留学を終えて帰国、一九一七・八、北京大学教授就任。

- (7) 胡頌平編著『胡適之先生年譜長編初稿』台北聯経出版事業公司、一九八四・五刊、一九八四・七、第二刷、第一冊頁一二三—一二四。

- (8) 『胡適留学日記』三、台湾商務印書館一九五九・三刊、頁六五—六五四。

- (9) 馮愛群編『胡適之先生紀念集』台北学生書局、一九六二・三刊、頁一八七。

- (10) 『胡適手稿』中冊頁二二七、『嘗試集』台北遠流出版社、一九八六・四刊、頁三、『嘗試集』上海書店、一九八二・二、第四版復刻裏表紙参照。

- (11) 『嘗試集』上海亞東圖書館、一九二二・一〇刊、上海書店、一九八

二・二、復刻、目録、『嘗試集』台北胡適紀念館、一九七八・六、修訂版、目録、参照。

尚、右の目録を見ると、四版では初版、再版のうちから、「孔丘」「他」「虞美人」「論詩雜記」三首、「寒江」「一念」「人力車夫」「四月二十五夜」「看花」「送叔永回四川」「自題歲暉室筭記十五卷彙編」「我的兒子」「週歲」「紀夢」「蔚藍的天上」「外交」の各首が刪去され、「威權」「二顆遭劫的星」「四十節的鬼歌」が新たに加えられ、又、「去国集」の「去国行」「翠樓吟庚戌重九」「水龍吟綺色佳秋暮」「游影飛兒瀑泉山作」「送許肇南歸国」「暮門行」が刪去されていることが分る。又、右の取捨選択については、任叔永、陳莎非、俞平伯等や魯迅の意見を聴いたようである。

- (12) 『嘗試集』自序、台北胡適紀念館、一九七八・六、修訂版、頁二八。

- (13) 『嘗試集』胡適紀念館刊、頁六八。

- (14) 同右

- (15) 『嘗試集』上海書店復刻、頁一三三、三三二、五二、五四。

- (16) 『四十自述』香港世界文摘出版社、一九五四・六刊、「逼上梁山」頁一二五。胡明編注『胡適詩存』人民文学出版社、一九八九・四刊、頁一二三。尚、この『胡適詩存』には、胡適の詩三百二十首(翻譯詩二十三首を含む)を収録したという。

- (17) 『嘗試集』胡適紀念館刊、頁三二「自序」。

- (18) 『胡適留学日記』三、頁七八三、『嘗試集』胡適紀念館刊、頁三二七。

- (19) 『胡適留学日記』三、頁七八九。

- (20) 『胡適留学日記』四、頁九三九。

- (21) 『胡適留学日記』四、頁九六五。

- (22) 『嘗試集』胡適紀念館刊、頁五五—六六。

- (23) 「談談『胡適之體』的詩」(民二五・二・五)、『胡適手稿』第十集中

冊頁三〇〇—三二〇。尚、この文をみると「胡適之体」は、平明であること、簡潔であること、風格があることを旨としていることが分かる。

(24) 『嘗試後集』胡適紀念館、一九七八・三、修訂版、頁二二二。

(25) 『詩選附山歌、民歌、云謡集』胡適紀念館、一九七一・二刊、はその活字本である。